

平成29年度第3回経営戦略会議 議事要旨

日 時 平成30年3月28日(水) 15:00-17:00
場 所 産業技術総合研究所 臨海副都心センター 別館11階多目的室

<委員> (敬称略)

内永 ゆか子 特定非営利活動法人ジャパン・ウィメンズ・イノベイティブ・ネットワーク (J-Win) 理事長
川本 裕子 早稲田大学大学院経営管理研究科 教授
山海 嘉之 筑波大学システム情報系 教授/筑波大学サイバニクス研究センター 研究統括/CYBERDYNE 株式会社 代表取締役社長(CEO)/内閣府 ImPACT 革新的研究開発推進プログラム プログラムマネージャー
中許 昌美 大阪産業技術研究所 理事長
野路 國夫 株式会社小松製作所 取締役会長/経済同友会 地方における新事業創造 PT 委員長
本目 精吾 株式会社エリオニクス 名誉会長

(ご欠席)

五神 真 東京大学 総長
榑原 定征 東レ株式会社 相談役/一般社団法人日本経済団体連合会 会長
松尾 清一 名古屋大学 総長

<産業技術総合研究所>

中鉢理事長、三木副理事長、理事、監事、領域長、他

<会議の概要>

平成29年度第3回経営戦略会議（3月28日開催）では、産総研発ベンチャー開発事業、及び産総研の広報活動についてお示しし、ご審議頂きました。また、最近の研究トピックスとして、産総研発ベンチャーの株式会社ナノルクスの事業内容について紹介しました。

<委員からの主なコメント> 参考：コメント最後のページ番号は速記録の該当ページ

- 産総研発ベンチャーにおいては、金額ベースだけでゴールを決めるのではなく、将来を見据えた戦略的な進め方（勝率は何%を目指すのか、どの分野を狙うのか、等）を考え、在るべき姿をフォーカスすることも重要なのではないか。
- ベンチャー創業には、最初のシードを生むためのお金（研究費）が必要。大阪大学のVCでは、研究の将来性を見抜く力を持った「目利き」を採用することで、お金の配分がうまくいき、大きな成果をあげているので、参考にしてみてもどうか。
- 日本の産業界においては、センサ、MEMSのシェアが低下している。特に、かつてシェア首位であったMEMSにおいては、半導体の試作を作るラインが無くなったことにより、業界が著しく衰退しており、今後の日本のIoT産業への影響が懸念される。TIAやSCRの製作ラインをもっとアピールして、使ってもらいやすい形にしていく取り組みが必要ではないか。
- ベンチャーに挑戦するような研究者を排出し、また新しい人材も入ってくるような、人材流動化のサイクルができれば、産総研全体の活性化につながるのではないか。
- アーリーステージの産総研発ベンチャーの方々が、クロスアポイントメントなどで相性の良い企業との共同プロジェクト等にお試しで参画できるような仕組みも産総研にあったら良いのではないか。
- 産総研発ベンチャーに挑戦する際には、リスクの高さから、元の環境に戻れるような仕組みにしておくことも重要なのではないか。また、ベンチャー創業後においても、産総研との関係を終了させるのではなく、ベンチャーで成功することによって、産総研にもリターンが得られるようなwin-winの関係となる仕組み作りができると、良いのではないか。

- 産総研ベンチャーは年間4～6社しか創業していない。ベンチャー創業につながる将来性のある研究活動をもっと推進すべきなのではないか。
- 音楽連動制御と電磁波遮蔽の1分動画については、内容が難しく、自分との関係がまったく分からなかった。例えば、電磁波遮蔽などについては、電磁波に敏感なお母さんたちもたくさんいるので、そういった身近な例を出すなどして、自分たちに関係があるという演出を見せるなど工夫してみてもどうか。
- 産総研のウェブサイトへのアクセスにおいては、利用者からすると、移動中ということも多いため、スマホ版のウェブサイトの周知及びコンテンツの強化に努めてもらえるとありがたい。
- 一般の人が溶け込みやすいように、マンガ的なタッチで、基礎研究がどういう風に社会へつながっていくかを身近な事例をふまえながら物語仕立てで見せることを検討されたらどうか。
- 産総研のウェブサイトの技術相談窓口については、字が小さく、固い雰囲気を感じる。相談実績や取組状況等なども見せて、アピールしたらどうか？